

## 第 13 話〈佐藤道元〉の要約と参考資料

### 第 13 話〈佐藤道元〉の要約

土呂久に佐藤姓が多いのは、源義経の忠臣佐藤忠信の子孫が住んだという伝説があるからです。忠信の孫の道元にちなんだ屋敷跡や八幡社も建っています。笈を背負っていたという道元は修験者だったのかも？ 修験者の特技の一つが鉱山を探し当てることでした。

### 第 13 話〈佐藤道元〉の参考資料

#### 1 3 - 1 佐藤家の家系図

荒谷の仏壇の上に掲げられた家系図より

(中央に) 先祖菩提供養 南無阿弥陀仏 土呂久荒谷佐藤家

(右に) 大織冠鎌足一 (以下 18 人、略) 一忠信 (四郎兵衛 吉野山合戦ニテ討死)  
一忠治 (庄司次郎 吉野山合戦ノ 4 字不明 三歳ノ男子ヲ抱キ日向ニ下向シ宮崎浮田邑ニ暫ク住ス) 一基信 (兵庫之允白杵郡高千穂上野邑秋原ニ暫ク住ス其ヨリ荒谷ニ暫ク住ス 其ノ所ハ八幡宮ヲ建立致シ 其後山裏西ノ内住ス其時 3 字不明 田村之薬師如来ヲ 2 字不明 大猿渡ニ安置ス (以上、山裏佐藤氏系図)) 一継信 (□五郎兵衛土呂久ニ住ス ((2 字不明 佐藤氏系図)) )

(左に) 樋口種実ノ明細記ニ道元ハ西ノ内 5 字不明 年ココニテ死ストモ伝ヘタリトアリ、忠治ヲ道元ノコトシテ伝ヘテイル物モアルガ、其ノ子基信ガ入道シテ道元ト云ツタモノデアルト推考セラレル。山裏系図ニハ忠治日向ニ下向宮崎浮田邑ニ暫ク住ストアリ、系図ニ其後ノ記載ガナイ。シカルニ基信ハ高千穂上野邑秋原ニ暫ク住シ、岩戸邑荒谷ニ暫ク住シ、更ニ山裏西ノ内ニ移転シ山裏庄ヲ中心トシテ高千穂一円ニ勢力ヲ有シタト考察サレル。以上。

昭和十一年二月九日 日向高千穂佐藤氏に就て 藤寺非宝師稿ヨリ抜粹。

尚土呂久荒谷ノ佐藤氏系図現存スレバ、アルイハ其ノ詳細ヲ知ル事ガ出来ルノデハナカロウカト思フガ、紛失シテ当家ニハ現存シナイ。4 字不明 道元越ハ祖母山ノ麓ニアリ、其ノ又麓ニ荒谷アリ。ササヤカナガラ 2 字不明 八幡宮アリ。道元ノ所縁ノ地ト伝ヘテイル。

昭和六十二年 3 字不明

浄土真宗本願寺派寶池山泉福寺住職藤寺心一

#### 1 3 - 2 八幡社

佐藤藤太さんの話 (1983 年 1 月 30 日聴取)

八幡さんは以前、2間半×2間の広さがありました。神楽は「荒谷」で38番全部舞っていた。わしが覚えてから、夜神楽は1回だけ見た。明治40年ごろ終わった。日神楽はそのあとも10年くらいあったでしょう。神楽を舞う人は「白石」の豊三郎、「竹の花」の今朝太郎、「岩下」の嘉十郎。それで足らんときは、土呂久以外から雇った。

佐藤実雄さんの話（1983年1月22日）

土呂久の神楽は「荒谷」でやりよった。前の八幡さんはもっと大きくて神楽殿があった。台風で倒れてから、荒谷で舞うことにした。

神社書上 日州臼杵郡延岡領高千穂 岩戸村神主 佐藤参河正信（岩戸支所文書 259）より  
岩戸村土路久

一、八幡

所祭神 応神天皇

勧請年月 不詳

社 竪二間半 横二間

境内山林 竪四十間 横四十間 御年貢地

祭日 十月十六日神楽

\*この文書がいつかのものかはっきりしないが、神仏分離のための調査書と思われる記載があることから、明治初頭のものであろう。

和合会議事録による祭日 大正6（1917）年

八幡祭 旧10月16日 土呂久一般（各組）

\*（川原考） 八幡社は江戸後期まで記載がないことからみて、個人の社にすぎなかったのであろう。それが明治になった頃から、畑中の氏神の性格をもち、神楽が舞われるようになった。その時期は土呂久の9割以上が佐藤姓を名乗るようになった時期にあたり、道元伝説がむら全体の伝説に広がっていったのではなかろうか。（A-2-2 DSC00199）

### 13-3 道元屋敷跡

西川功「高千穂太平記」P172

この忠信の子佐藤次郎<sup>ただはる</sup>忠治が、吉野山合戦から日向国に下り、宮崎郡浮田村に暫く住み、高千穂に入って上野村に住み、後上岩戸の西の内に移ったと言うことになって居る。系図によっては、忠治の子兵庫允基信が臼杵郡に入り、上野村秋原に住み、後岩戸の荒谷に移り、更に西の内に移ったと言う説もある。

\*注：忠治が道元のこと。

甲斐叡常著「高千穂村々探訪」P169 より

西之内には佐藤道元が住んでいたという屋敷跡があり、その下の森に寛政 5 年に建立した墓がある。この佐藤道元は佐藤忠信の子である忠信は屋島で教経の強弓の矢を義経の矢面に立ちふさがって戦死した佐藤継信の弟同じ陸奥信夫<sup>しのぶ</sup>の莊司元信の子や義経が頼朝挙兵に応じ兄と共に従軍したのが佐藤忠信であり、忠信は吉野山で山僧横川覚範らの攻撃を受けた時、義経の自害を止め自ら義経也と名乗って奮戦その間に義経を奥州へ逃がした、後京都に潜伏しているのを頼朝方に攻められ自害している。この忠信の子忠治が吉野山を逃れ日向に下り高千穂に入り西之内に住すと系図にあるが、この忠信の子忠治が道元だとすると道元は文暦元年（1234）に西之内に住んでいる。父の忠信は文治二年（1186）に 26 歳で死んでいるのでその間 48 年 26 歳で父が死んだ時 5, 6 歳の子供だとすると道元の死は 54, 5 歳ということになる。この道元屋敷と称するのは町内五ヶ所の笈の町（松か）と上野王農内と三ヶ所ある。

佐藤チトセさんの話（1983 年 1 月聴取）

新屋の下の畑に道元が横わして、山裏の方に越さしたげな。

佐藤実雄さんの話（1983 年 1 月 22 日聴取）

道元が八幡さんを持ってきたげな。「道元越」の道はなかったが、道元が踏み分けて通ったので、この名がついた。

\*道元越は、土呂久の西 2 キロ。親父山から南下した稜線にあり、土呂久と王農内を結ぶ峠。

13-4 修験者・佐藤道元

西川功「高千穂太平記」P178

道元が高千穂入りした時、始めて笈（おい）を降ろした所が五ヶ所の笈の町（おいのまち）であり、笈の町にも道元の墓があると伝えられている。いずれにしても、此の様な伝説や道元越という地名迄残す程の人物であるから、相当な人物であつたに違いない。

広辞苑

おい[笈] 行脚僧・修験者などが仏具・衣服・食器などを入れて背に負う箱。つづらに似、四隅に脚があり、戸によって開閉する。

### 13-5 上野村秋原

高千穂町史 郷土史編 P263

#### 上野村の銀山見立

高千穂町立上野中学校東側に尾野山がある。尾野山の北面山系の一角に「神女久曾<sup>かみめぐそう</sup>」といわれる地名があり、古くから地元の人々はこの付近に鉱山があったと口伝している。その場所は断定できないが、この鉱山とも思われる裏付けともなる古文書が、次の正徳6年(1716)一享保元年一船の尾代官所役人であった工藤元右衛門の「公私用候扣<sup>こうしもちいそうろうひかえ</sup>」である。

\*秋原から尾野山まで直線距離で約1.2キロ。この古文書では、上野村の熊右衛門が「銀山見立て」のために小屋を建てることなどを要望している。秋原の近くで銀の採取がされていたことを裏付けている？

甲斐岨常著「高千穂村々探訪」P167

黒葛原、秋元、西之内、登尾を総称して日向<sup>ひなた</sup>と言っているが、ここは古くから土呂久と共に鉱山開発の行われた地区で登尾の萱野鉱山、黒葛原鉱山は江戸の初期から開発され、中でも萱野鉱山は徳川時代に盛んに採掘され三ツ合はその中心市街をなしていた。桑之内の庄屋の記録に「登尾銀山、戸二千軒」とある。